

Title	ラブレーのスカト・ロジック：『ガルガンチュア』第十三章翻弄訳試案
Sub Title	Translation of the 13th chapter of Gargantua
Author	荻野, 安奈(Ogino, Anna)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	1997
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.72, (1997. 6) ,p.231(58)- 248(41)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00720001-0248">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00720001-0248</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

# ラブレーのスカト・ロジック

——『ガルガンチュア』第十三章翻弄訳試案——

萩野 アンナ

ページをめくれば匂いたつ、という形容が、ラブレーほどふさわしい作家はないだろう。ただしその匂い、プルーストの「記憶袋」に揺さぶりをかけるマドレーヌの、仄かに湿った甘い香りとは似ても似つかない。

いやむしろ、同じ物質の使用前・使用後の劇的変化というべきか。テーブルからトイレへ場を移せば、マドレーヌは大、紅茶は小の便となり果て、臭気ふんぶん、識閥にさしかかった記憶も、あわてて元来た無意識の底へ、オマル経由ですとんと落ちる。

無意識のドブ浚いが得意な言葉のマッチョ、フランソワ・ラブレーに話を戻そう。真贋が問題となる『第五之書』は別としても、『第一之書』から『第四之書』まで、作中の至る所に「うんこで縁飾りがしてある」(『第二之書』p. 46)<sup>(1)</sup>のは一目瞭然。

フィクション処女作である『第二之書』でも、ようやく話の糸がほぐれ始めたところで、さっそくに臭う。臭いの元は第六章に登場するスカした学生である。田舎出身のパリ暮らし、いっばしのインテリを気取り、主人公の巨人パンタグリユエルを前に、ラテン語もどきのフランス語を披露に及ぶ。苛立った巨人に首根っこを掴まれた彼が、すぐに放免されたそのわけは、「洋袴シヨースのなかへたっぷりと糞をたれてしまったからである」(p. 51)。

作者の生前に刊行された最後の作品『第四之書』の、その最終章は、パニユルジュが「故もない恐怖から垂れ流し」た話。「第二之書」で初登場の頃は切れ者の小悪党だったパニユルジュも、『第三之書』で結婚すべきか否か迷った頃からミソがつき、『第四之書』では見る影もない小心者を

演じている。彼の、まさに最後っ屁を、人は「便とでも、糞とでも、うんことでも、うんちとでも、糞滓とでも」呼ぶだろうが、実は「ヒベルニヤの泊夫藍<sup>サフラン</sup>」なのだ、本人が開き直って幕となる (p. 301)。円環は閉じられた、というべきか。しかし航海譚としては、目的地への到着を待たずに話の糸が切れ、作品自体が「垂れ流し」ではある。

『第二之書』の軽薄なインテリ指向の学生と、『第四之書』の怖じ気づいたパニユルジュと。共に自我の輪郭が定まらず、地に足の付かない人物が、自らの排泄物にまみれることで現実との接触を取戻し、文字通り「放免」されている。恥辱と救済が裏表一体の、両義的な存在、糞<sup>(2)</sup>。

かくしてラブレー作品のとば口と出口を飾り、作中でも要所要所に置かれたウンコ玉は、作者の気質と時代の趣味とジャンルの要請を体現するに止まらない<sup>(3)</sup>。作者の筆圧が高まる場面では、ファルス的な糞と、ユマニスト的な糞が、捩り合わさってひとつのとぐろを形成していることは、たとえば『第四之書』第六十章に明らかである。

この章は、パンタグリユエルの一行が「世界第一の技芸宗匠<sup>ガステル</sup>大腹師」の島へ寄港したエピソードの一部を成す。大腹師は空腹の擬人化であり、また飢餓の克服をめざして発達を遂げたテクノロジーの象徴でもある。「土地を耕すために鍛冶と農耕の術を創案し」、交通手段を発明し、天候を調整し、更には生産物の保存のため「市街や砦や城を建てる術を創案」し、また敵による略奪に対抗すべく「大砲、蛇形砲、長砲、白砲、大白砲を創案した」のも彼、という設定である (p.273-p. 275)。

文明の恩恵と最終兵器の恐怖を、共に人類に授けた問題の人物が大腹師なのである。彼を神と崇める腹崇拜族が、師に奉った美味佳肴の羅列で、五十九と六十の二章が埋め尽くされている。

肉断ちの日ですら、読むだに涎の垂れそうな、カラスミやウナギやシタビラメやイカやウニの行列で、「その間にも、宗匠は永劫無窮に酒を呑んで」 (p. 272) いるという、まさに鯛やヒラメの舞い踊り状態。ところが文庫本にして九ページにわたる御馳走一覧表の最後を飾るのは、他ならぬオマルなのである。

腹崇拜族にとっては崇拜の対象でも、大腹師本人は「神様などではなく、哀れで、卑しく、か弱い人間だと告白」(p. 272)し、無節操な崇拜者たちに、自分のオマル椅子の中身を開陳する。「宗匠の放り出す糞便中に、いかなる神々しさがあるものかどうかを見させ、観察させ、哲学させ、瞑想させ」るためである (p. 273)。

天使をめざそうとして豚になり、進歩の果てに「三倍も呪わしい地獄の機械」(p. 276)を発明する精神の、華麗なる美食遍歴の終着駅はオマル椅子の底。糞便はここに至って、人間の条件そのものとなる。

哲学と瞑想の、形而上へ向かうベクトルが、形而下の最右翼、糞便に向けられるとき、あられもない湯気の向こうで凝固しているのは、「汝自らを知れ」の大いなる沈黙かもしれない。

排泄物と対峙する人間は、声を失う。存在のぎりぎり、自我のゼロ地点で、生物としての原点に貶められつつ解放される、厳粛なる滑稽の一瞬である。糞マジメ、というマジメがそこにはある。マジメでも糞、と言い換えれば意味を失う際どきである。その際どきにこそラブレーは、賭けていたのかもしれない。冗談と真意の危ういつばぜり合いの切っ先に、真理の幻を見ようとしたのが、彼の時代なのである<sup>(4)</sup>。

この大腹の一件でも、ラブレーがウンコの活用法を熟知していたことはお分かりいただけたと思う。その彼でも、まるまる一章を糞尿譚に充てたのは、『第一之書ガルガンチュア』の第十三章<sup>(5)</sup>において他にない。

糞を主題として冒頭から結末まで一貫性を持たせることは至難の技である。その特性から、ディテールとして有効な糞であるが、ナレーションを牽引する力としてはマイナスに働く、と考えたほうがいいたろう。排泄物の存在自体が行為の結果であり、原因として物語を呼んでくるには無理がある。

先に挙げた二例においても、ズボンに垂れた瞬間にエピソードは頂点としてのどん底を極め、一挙に終局を迎えている。糞の機能は *dernier mot* (最後の言葉、極み) としてのそれであり、文字通り話を「おとす」のに功がある。

ここで「汝自らを知れ」の大いなる沈黙に立ち返る。目にあざとく、鼻にえげつない、いわば饒舌な物質である糞は、同時にそれと対峙する人間を、深い沈黙に誘う「瞑想」の種でもある。脱糞という、シンバルを打ち鳴らすのがとき派手な行為を通過した後、テキストは一瞬停止して、黙り込む。沈黙を、それと悟らせない臭気やら湯気やらで、読者が目眩ましを食らっている間に、作者は新たな展開を用意して、何事もなかったかのように次なる一行へと移る。

糞という沈黙を、物語的思想の停止を、全編に散りばめ、なおかつ独立したエピソードとして機能しているのが問題の十三章なのである。五歳のガルガンチュアが、久しぶりの水入らずを楽しむ父に、すばらしい尻拭きを発見した旨、微に入り細に入り報告する。動植物からインテリア用品まで、およそトイレトペーパーに相応しからぬ品々を、拭いては捨て、拭いては捨て、その列挙で一篇に仕上がっている。

起承転結の、起を尻拭話の設定とすれば、最高の尻拭きに行き着いたのがケツとなる。その間は承もなく転もなく、次々と素材を変えながら、無限に近い感覚で、拭く動作のみが繰り返される。この世に存在可能なあらゆる名詞を相手にして、たったひとつの動詞「拭く」が健闘している。

問題にされているのは「何で」拭いたか、という一点であり、「何を」は自明の理として省略されている。考えてみれば拭く回数と同じ数だけウンコが生産されたわけで、全編に大腹師式の「観察」と「哲学」と「瞑想」が満ち満ちている。

言葉で綴られた沈黙、という矛盾。排泄をめぐる散文詩。排泄と詩の組み合わせは突飛に見えるかもしれない<sup>(6)</sup>が、ラブレーはご丁寧にも、本文中に韻文の排泄詩を三個挿入して、靈感の昂りを読者に知らしめている。

以上の素材と構想がいかなる全体を形成し得るのか。ラブレーのスカトロなロジックを文体のレベルで、おまけに日本語で、なぞっていくのが今回の試みである。訳出にあたっては、出来る限り原典<sup>(7)</sup>に忠実たらんとした。ただし字面よりはそのイメージ喚起力に、である。注なしで現在の日本の読者に同質の可笑しみを伝える努力は、いふなれば翻訳の一步先、翻

案の一手手前、翻弄訳と称した所以である。必要と思われる箇所ではテキストをせき止め、「弁士」として言葉を挟ませていただく。それではさっそくイキんでみよう。

〈第十三章 ガルガンチュアが尻拭法を発見し、その頭の冴えをグラングージェが悟った次第

ガルガンチュアが六歳目前というときに、グラングージェは鬼ヶ島人を平らげて帰国し、息子のもとに現れた。再会の喜びは大変なもので、この父にしてこの子あり、のわが子を抱きしめ、頬ずりし、あれやこれや細々と、坊や向けの質問をしたのであった。そして息子とベビーシッターたちを相手に、さしつさされつ、飲みも飲んだり。彼女たちに何にもまして念を押ししたのは、息子をきれいにこざっぱりとしておいてくれたか、という一点であった。これにガルガンチュアが答えて、その点は実にきちんと身を処したので、国中で自分より清潔な男の子はいない、というのであった。

—どういふことかね、とグラングージェは言った。

—実は僕（とガルガンチュアは答えた）、長期にわたる綿密な実験によって、尻拭法を発見したんだよ。最高にVIPっぽくて、最高にエクセレントで、最高にばっちりの、かつてない、ってやつ。

—どんなかな？、とグラングージェ。

—これから（とガルガンチュア）、話すからさ。>

VIPで、エクセレントで、ばっちり、の他にも、最初は「王様らしい」という形容が、「尻拭法」には付いていた。この一見無害な単語が決定稿から姿を消したのは、時の王フランソワ一世が痔瘻で苦しんでいた、という特殊事情による。「尻拭法」についた形容詞は、かくして四から一引く三連発になったわけだが、これを別にすれば、きわめて簡潔な筆の運びのうちに、父と幼子の親密な空間が設定され、話の種が蒔かれた。

グラングージェがわが子にした質問を、「坊や向けの」と訳しておいた

が、原語では pueriles。現在なら「子供じみた」と軽蔑的なニュアンスになるが、当時は子供の領分を指すに止まる。わが子の視線に降りてきた巨人王が、「僕ちゃんは、元気でちゅか」と凶体に似合わぬ甘い言葉で子をあやし、喜色満面の様が目に浮かぶ。

ガルガンチュアのほうは、五歳にして父の晩酌につきあい、言葉遣いも「長期にわたる綿密な実験」などと、年齢不相応な利発さ、小賢しさが伺える。話に興が乗るにつれ、本格的にウン蓄を傾け始め、ラテン語句を挟み、韻文をモノシ、三段論法をこなすに至る。

一方で「実験」の対象が尻拭き、というのが、いかにも肛門期の子供らしい。「綿密」とは名ばかり、周辺に散らばっているものを、手当たり次第に尻拭きにしていく様は、何でも口に放り込まずにはいられない赤子と大差はない。

この時ガルガンチュア五歳に対して、作者の推定年齢は五十歳<sup>(6)</sup>。以後のディスクールでは、五歳児と五十歳児がめまぐるしく入れ替わり、立ちかわりすることになる。子供の部分と大人びた部分の落差を明確にする意図で、ガルガンチュアのセリフは pueriles にと心掛けた。その彼が、いよいよ拭く。

くある時拭いたんだ、お付きのお嬢さんのピロードの、ブス隠しマフラーで。気持ちよかったよ、絹のすべすべがお尻に、とっても快感だったよ。

またある時は、その娘のハットで拭いたらば、はっとする程よかったな。

またある時は、スカーフで。

またある時は、イヤー・マフ。スカーレットのサテンのやつ。でもね、金ピカ玉飾りがウンとこさ付いてて、それでお尻がずたずたに擦りむけちゃった。こんな飾りを作った宝石職人や、こんなの付けてた女の子の直腸なんか、エボラ出血熱で焼けちゃえばいいんだ！

痛みが治まったのは、ボーイさんのキャップのおかげ、スイス風にふんわか羽根のついたので拭いたんだ。

それから、藪の後ろでヒッてたときに、三月猫を見つけたので、こいつで拭いたら、爪でガリッとやられて、会陰部全域が潰瘍化しちゃった。

翌日に全快したのは、満香の匂いたつお母ちゃまの手袋で拭いたからさ。>

尻拭きの先発隊は、帽子やスカーフなど、女性の装身具が中心となっている。今ならさしずめシャネルのスカーフにプラダのバッグ、グッチの手袋と、ブランド品を血祭りに挙げている感じだろうか。

「ブス隠しマフラー」の原語は cachelet。cache-nez（頭巾に取り付け、顔の下半分を覆う防寒用の布）に laid（ブス）を掛け合わせて遊んでいる。

同様の洒落は雪崩のごとく、枚挙に暇がないが、代表として、母の手袋にたきこめた「満香」の出所は明らかにしておこう。原語の maujoin は、benjoin（安息香）を bien joint（ぴったり閉まった）にスライドさせてから、bien を反義語の mal に置き換えたもの。非閉物とは、女性器を指す。ちなみに渡辺一夫訳では「割日安息香」となっている。

フランス語の洒落を日本語で再現するついでに、当時の服飾や風俗に特有のものは、現代における類似品と置き換えておいた。たとえば「イヤーマフ」に変身したのは aureillettes、頭巾の耳覆いの部分であるが、ここには金、パール、鎖などで縫い取りが施されていた。その飾り玉でお尻を引っ掻いた、というわけ。「エボラ出血熱」に見立てたのは通称「聖アントワーヌ熱」の麦角中毒である。「聖アントワーヌ熱に焼かれてしまえ！」は笑劇でおなじみの呪詛の言葉であった。

装身具と不幸な猫一拭かれた時にキヤッと叫んだことだろうーを試した後のテキストは、一転して植物図鑑の様相を呈する。

<それから僕が拭いたのは、セージにウイキョウ、ディル、ハナハッカにバラ、カボチャの葉っぱにキャベツに唐ザシャに葡萄の葉、マシユマロ草に猛ズイカ（これはお尻を炎症赤染にするよ）、サラダ菜にほうれん草、一どれもいまいち、アシからずー、便出草に、桃尻狂草に、は

らほろヒレハリ草、これのせいで僕は香港A型赤痢にかかったけど、自分の股袋で拭いたら治っちゃった。)

一見ランダムのようなこの羅列、内なる必然に支えられていることは、それぞれの植物の特性から分かる。セージからバラまではスパイス類。カボチャから葡萄へ、野菜・果物の葉が続く。「マシュマロ草」は現代仏語で *guimauve*、英名 *marshmallow* (かつてはその根が素材であったことから、菓子に名を残した)、和名タチアオイ。含まれる粘液に緩和、鎮咳の効果が有り、葉と根は煎じ薬として用いられる。

ここまでは、いずれも体にやさしい植物である。次のモウズイカも、花が呼吸器疾患の煎じ薬に使われる。恐らくは鎮咳のタチアオイからの連想で筆に上ったのだろうが、テキストに出現するなり、花よりも葉のほうへ、作者の関心は移ったと見える。その葉はギザギザで、綿毛に覆われており、子供の笞打ちに使われたという説もあり、それが尻の「赤染」というコメントに反映されている。

モウズイカに体现される治癒と殴打の両義性が、以後の羅列に微妙な影を投げかけることになる。サラダ菜とほうれん草でいったんは野菜に戻るが、「どれもいまいち」。より原語に近い渡辺訳では「みんなあんよにはとても効きましたがね」とあり、尻拭きとしての機能性よりは、むしろ治癒力の欠如を問題とする発言に取れる。

後に置かれた四つの植物は、治癒と殴打のいずれかにおいて「とても効き」そうなものばかりである。和名ではそれぞれヤマアイ、ハルタデ、イラクサ、ヒレハリソウとなる。ヤマアイは下剤、ヒレハリソウは下痢止めと、効用は逆ながら、ようやく尻拭き話に相応しい薬草の登場である。残るハルタデとイラクサは、共に尻への攻撃性において突出している。ことにハルタデ (*persicaire*) は通称が *culrage* (尻激痛)、その由来は葉で拭くと尻を傷めるから、と十六世紀の本草書にある。元来が桃の木 (*persicus*) と同じ語源ゆえ、桃尻狂草と戯訳した。

かくして香草に始まった羅列は、限りなくクソに近いクサへと収斂し、調薬から打擲へのグラデーションが完成する。結果背負いこんだ疫病 (直

訳するとロンバルディア赤痢)を、股袋で治すところなど、目には目、の下ネタ志向が心憎いばかりである。

アウトドアの植物観察が済んで、主人公の目は室内に向けられる。

〈それから拭いたよ、シーツで、毛布で、カーテンで、クッションで、絨毯で、賭博台の緑クロスで、ダスキんで、ナプキンで、ハンカチで、化粧ケープで。どれもこれも、気持ちいいことといったら、アトピーの人がぼりぼり搔いてもらう時以上の快感だったよ。

—そりゃそうだろうが (とグラングージェ)、どの尻拭きがいちばん良かったのかな？

—話してるとこ (とガルガンチュア)、聞いてりゃ分かるよジ・エンドの真相は。僕は拭いたよ、まぐさで、薬で、麻くずで、動物の抜け毛で、羊毛で、紙で。でもね、

紙で拭くのは厚顔無恥さ

あとに残るよ睾丸ウンチ)

室内の後は家畜小屋、それからようやく紙である。ここまでガルガンチュアの弁舌をひたすら拝聴していた読者が、そろそろ退屈する頃と作者は踏んだのか、グラングージェに介入させ、ガルガンチュアから新たな反応を引き出すことに成功している。恐るべき五歳児は「ジ・エンドの真相」(tu autem) とラテン語で学のあるところを見せ、即興の二行詩まで披露する。

〈—なんと (とグラングージェが言った)、かわいいタマキン坊や、僕ちゃんが酒を飲むのはサケがたい、もうすっかり尿瓶<sup>しびん</sup>、いや詩人だからな。

—そのとおりに (とガルガンチュアが答えた)、お父ちゃまの王ちゃま、僕はね、ウンとこさとポエムして、韻に淫して陰にこもっちゃったり。聞いてちょ、僕らのおトイレが、糞ひり人に何と言ってるか。〉

息子の詩に挑発された父は駄洒落で返し、それに息子が駄洒落で答え、まさに「この父にしてこの子あり」、以後はジャズのセッションしながらに、掛け合いで盛り上がることになる。さしずめ父がドラムで子はピア

ノ。当面はピアノの韻文独奏が場面を引っ張っていくことになる。先ほどの二行詩で見つけた主旋律を、転調させリズムを変えながら展開した結果が、次なるトイレ詩。鼻をつまんで耳を傾けてみよう。

くくそったれ  
げりっぴい  
屁っこきの  
糞ころ君  
ホカ便を  
ぶりぶりと  
僕らの上に  
まき散らす  
ばばちっち  
うんちっち  
垂りらりら  
おまえなんかエンガチョさ  
穴という  
穴が全開  
したならば  
お尻拭かずにサヨオナラ  
もっとお望みでちゅか。

—もっちりーん、とグラングージェは答えた。

—んじゃ、とガルガンチュアは言った。

ポエム

この前クソして鼻にきた  
お尻の借りを返した臭い  
そのクさいこと想像以上  
おかげで全身ウン香漬け  
俺のお待ちかねの恋人を  
誰か連れてきてくれたら

ウンチング・ラブ

したら彼女のシッコ穴に  
ワイルドにハメたろうに  
その間彼女は指使い  
俺の肛門をキメたろうに  
ウンチング・ラブ

二番目の詩は、クレマン・マロの二音綴の風刺詩に想を得たりズミカルなもの<sup>(9)</sup>。タリラリラでは戯訳と思われるかもしれないが、ラブレーが糞便をlard(脂身)と呼べばこちらは「ホカ便」で応え、それなりに綿密な対応を心掛けたつもりである。

三番目の「ポエム」、原典ではrondeauと、詩形が明記してある。これまたマロ風に、形式はしかるべく整えてあるが、中身はタブー知らずで「サドも色なし」とは、某注釈者の言である<sup>(10)</sup>。少々やり過ぎたと、さすがのガルガンチュアも反省したらしい。彼らしくもない発言でお茶を濁そうとする。

〈実をいうと、僕にはさっぱりチンプンカンプン。トイパーの紙かけて、僕が作ったんじゃないんだもん。こちらのおばあちゃまが詠んでるのを聞いて、記憶のズダ袋にポイ込んでおいたんだ。

—本題へ(とグラングージェ), 戻ろうよ。

—何だっけ?(とガルガンチュア), 垂れる話?

—いや(とグラングージェ), 拭くほうさ。

—でも(とガルガンチュア), この話でお父ちゃまをへこませたら、灘の生一本をこもかぶりの樽でオゴってくれる?

—いいとも, とグラングージェは言った。

—排泄物なき場合は(とガルガンチュアは言った), 尻拭きの必要は皆無なり。脱糞なかりせば, 排泄物は有りえず。しかりしこうして, 尻拭き前に脱糞の要あり。

—おやまあ(とグラングージェ), 僕ちゃんは冴えてるねえ。近々楽間

博士にしてやろうじゃないの。おまえは年端がいかないのに頓知派だからな。さあ尻拭話を続けてくれよ。髪かけて髭かけて、酒を樽ひとつじゃなくて六十、大樽で進呈するよ。それも銘酒、灘といっても日向灘でも玄界灘でもカナダでもないぞ、うまし国兵庫県は灘地方の生一本、菊座正宗だ。>

「チンプンカンプン」とあわててブリッコする息子を、「本題へ戻ろう」と父は軽くいなす。息子、「何だっけ」とボケれば、父、「拭くほうき」とツッコミを入れる。今度は息子が三段論法でツッコめば、父は駄洒落でボケにまわる。まさにアウンの呼吸。会話の妙は言うまでもないが、テキスト中で、漫才における間の役割を果たしているのは、どうやらカッコの部分であるらしい。

この場面、「と…は言った」を繰り返さずとも、流れの中で誰のセリフと容易に分かる。先行する第五章では、不特定多数の酔っぱらいの戯言を、地の文抜きでぶちまけて、意図的に発話者の特定を不可能にした作者である。第十三章でくどきに徹しているとすれば、やはり効果を狙ったのことと思われる。

試しにカッコ抜きで読んでみる。セリフのスピードが二倍に感じられる。台本を棒読みしている漫才に近くなる。

カッコとは、恰好のプレーキ。

近代の版では、ラブレの原典にないアクセント記号を校訂者が加えている例も多いが、第十三章のカッコ群は、決定稿と見做される一五四二年版のファクシミリにも、鮮やかにその姿を止めている。<sup>(11)</sup>

「早い話が…」とスローモーションで言ってみせるのと同質のオトボケ。饒舌とスピード感こそラブレ、と思われがちだが、実は必要とあらば鈍行で済ませる柔軟性が、その身上なのである。

こうして父に酒六十樽を約束されたガルガンチュア、ニンジンを前にした馬と化す。テキストを音読するならば、ここは大きくひと呼吸入れたいところである。宙ぶり状態の欲望が生む沈黙が、先ほどの父のセリフと、次の息子のセリフを隔てている。

〈—僕はその後拭きました（とガルガンチュア）、ヴェールに、枕に、スリッパに、巾着に、籠ときた—籠はサイテーの尻拭きだったよ—それから帽子。さて帽子にもいろいろござる、毛足の長い短い、ピロードっぽくすべすべ、タフタっぽくつるつる、サテンっぽくつやつや。一番の上物は毛足がふさふさしたの、だって、それって排泄物の一掃排除にぴったりなんだ。

それから拭きも拭いたり、めんどり、おんどり、ひよこ、子牛の革、兎、鳩、鶴、弁護士のアタッシェケース、覆面マスク、かぶりもの、革製の鳥型。

でもね、結論としては、産毛がふかふかのガチョウのひなに優る尻拭きはない、と断言してはばからないね僕は。ただしひなの頭を股で挟むようにしないとね。僕の名誉にかけて信じてよ。だってね、お尻の穴が夢見心地の気持ちよきなんだ、産毛がふかふかだし、ひなが程よい体温で。これがすぐ直腸や他の臓器に伝わって、心臓や脳のあたりまで達するんだ。極楽にいる善男善女・仏さまの法悦は、そこらの婆ちゃん連が言うような、蓮の花や彼岸団子や甘露のおかげだなんて思わないでね。それはね、（僕の考えでは）、極楽の人たちがガチョウのひなでお尻を拭いてるからなんだよ。これはドゥンス・スコトゥス先生のご意見でもあるんだけどね。〉

ここでガルガンチュアは口を閉じ、同時に十三章も終わりを告げる。聞いたグラングージェの反応から、次なる章が始まる。

味のある親子漫才に得意の羅列芸を演じさせ、動植物、室内外のオブジェ、すべからく尻拭きに仕立てあげた、会心の一章。筋はなくともテキストは実る。味わった読者には、解釈という排泄行為が残されている。

先達の、さまざまにヒット中から、対照的な二例を選びだしてみよう。いちばん元気のいいトグロは、おなじみ「肉体的下層」からラブレーを語るミハイール・バフチーンのものである。「人間を直接取り巻いている小世界のほとんどすべて」が尻拭きと化す意外性の運動が、帽子や頭巾など

頭を飾るもの、食品や薬草など口に入るものまで巻き込んで、「肉体の上層の下層への位置変更」を起こし、「事物は、その新しい奪冠的な使用方法によって、文字通り生れ変る」。価値観の硬化した過去と、まさにケツ別し、新たな時代の「陽気な財産目録」を作成して見せたエピソード、というわけだ<sup>(12)</sup>。

さり気ないイメージから作中に隠された紋章を炙り出し、コロリとまとめたのは、フランソワ・リゴロである。そのイメージとは、最後の尻拭き、ガチョウのヒナを股に挟むポーズである。同様の体勢が、ミケランジェロ描くところの「レダと白鳥」に見られる。この絵は一五三二年のリヨンで話題を集めていたから、ラブレーの目に触れた可能性は高い。のみならず、絵の意匠は新プラトン主義における慈悲の象徴であり、ガルガンチュアが帽子につけた徽章のキーワードもまた慈悲。プラトニズムの色を帯びた福音主義はラブレーの信奉するところ、と因果の糸を紡げば、尻拭話もあつという間に高度に文化的な寓意に変身する<sup>(13)</sup>。

リゴロはまた、結語におけるガルガンチュアのドゥンス・スコトゥスへの言及に注目し、この決定稿における唯一の加筆部分から解きほぐして、尻拭きにスコラ哲学風刺を読み取ろうとする。たしかに作中では、しばしばスコラの二横綱、実在論のドゥンス・スコトゥスと唯名論のウィリアム・オブ・オッカムが、同じ風刺の土俵に載せられている。しかし尻拭きの「産毛がふかふかのガチョウのヒナ」(un oyzon bien dumeté)に潜む音の遊びから「すっかりドゥンス化したオッカム」(un Okham bien Duns-Scoté)を呼び出してくるところなど、ラブレーもびっくり、かもしれない<sup>(14)</sup>。

肉体的下層のトグロか、はたまた風刺のコロコロか。方向性は違えど、いずれもガルガンチュアの、五歳児ではなく五十歳児の部分に向けられた読みといえる。

ユーモアを既成の図式の「ズレ」を楽しむ能力<sup>(15)</sup>と見れば、ブランド品を尻拭きにズラしたり、「レダ」の白鳥をガチョウにズラして見せる手さばきは得心がいく。しかしそれは、あくまでも大人が、旧知の枠を外す

ことでカオスを呼び込み、ユーモアを媒体として新たな世界の組み替えを目指す運動なのである。

一方、図式の備蓄を持ち合わせない子供にとって、世界はズラすまでもなく未知そのもの。外部との接触は、カオスに向かって自らを開いていく動作に他ならない。そのようにして五歳のガルガンチュアは、彼の小さな世界に立ち向かっていった。

尻拭きの対象となった物は、猫から薔薇まで、ジャンルの統一もなく、筆が向くままの雑多な選択と見えるかもしれないが、いずれも五歳児が歩ける範囲に存在するものばかり。大砲や船の帆で拭かせないところが、ラプレーなりのリアリズムである。

尻拭きの方程式を持ち合わせないものに、拭いてよいもの、悪いものの別は存在しない。女の手袋で拭き、サラダ菜で拭く。タブー破りの意識は、五十歳児にはあるが五歳児にはない。奪冠にせよ風刺にせよ、意味に依存する快感などクソくらえ、彼の唯一の関心は自分のお尻に向けられている。拭き心地の善し悪し以外の価値観を持たない、という点で、結晶度の高い純粋な世界、と言えるかもしれない。

ラプレー世界の風通しの良さは、五十歳児が、五歳児に裏打ちされて成り立つ。そのよちよち歩きは、不思議なことに、人類のジグザグの歩みと自ずから重なる。

ここで実在の尻拭話を、トイレの専門家に語ってもらおう。アフリカのサバンナ地帯では川に張ったロープを、ニューギニアや日本ではフキやハマボウの葉っぱを用いる。アイヌはサルオガセ、アメリカ農村部はトウモロコシの穂先の房毛、と次々に紹介してから、『はばかりながら』の著者は以下のように尻拭き分布をまとめて見せる。

〈世界中、ロープ（アフリカ、中国、日本）、樹皮（ネパール、日本《アイヌ》）、ボロ切れ（ブータンなど）、海綿（地中海諸島）、苔（北極圏）、石（エジプトなど）、砂（サウジアラビアなど）、土（アラブ諸国）、土板（パキスタン、古代日本）など、さまざまなものが使われてきた。

十七～十九世紀のフランスでは亜麻や糸くず、羊毛などが使われていた<sup>(16)</sup>。>

無数のガルガンチュアが、世界各地で拭きまくっている姿が、目に浮かぶようだ。ラブレーの奇想と思われた部分にこそ、尻拭きの現実があった。これぞ糞リアリズム、というのがケツ語である。

## 注

- (1) 『ガルガンチュア』十三章以外の箇所は渡辺一夫訳に拠った。  
『ラブレー第一之書ガルガンチュワ物語』、ワイド版岩波文庫、1991年。  
『ラブレー第二之書パンタグリユエル物語』、ワイド版岩波文庫、1991年。  
『ラブレー第四之書パンタグリユエル物語』、ワイド版岩波文庫、1991年。
- (2) 尿もまた、ラブレー作品では華々しい活躍ぶりを見せる。主人公の巨人性と結びつくと、放尿は敵兵を溺死させる武器となり（『第二之書』第二十八章）、また「女や子供を除いて二十六万四千八百十八人」のバリ市民が犠牲になる天災とも化す（『第一之書』第十七章）。そのダイナミックな破壊力から生じる解放感は、糞便の自己完結性とは一線を画するゆえ、当論では扱わないことにする。
- (3) 当時のスカトロ趣味の雄として、ラブレーと縁の深い民衆本『ティル・オイレンシュピーゲル』を挙げておきたい。たとえばドイツ語版三五話で、ティルは自らのころころウンチを「予言者の実」と称し、「この一粒を口にふくみ、しかる後鼻にさしこむ者は、たちどころに真実をのべるという代物」とのふれこみで、高値でユダヤ人に売りつけている（『ティル・オイレンシュピーゲルの愉快ないたずら』、藤代幸一訳、法政大学出版局、1979年、pp. 97-99）。
- (4) ルネサンスの「おもしろまじめ」精神は、「単に修辞の領域にとどまらず、ひとつの理想の生き方なのでもあった」（宮下志朗『ラブレー周遊記』、東京大学出版会、1997年、p. 37）。
- (5) 『ガルガンチュア』の初版は一五三四年（か三五年、確証はない）。いずれにせよ三七年以前の版では、現在の第五章が第四章の末尾に吸収されているため、現一三章は一二章になっている。
- (6) ちなみに『第四之書』最終章でパニユルジュが垂れ流したのは、「詩神たちに敬礼を送る」べく撃った大砲の音に驚いたためである。（Rabelais, *Oeuvres complètes*, éd. par Mireille Huchon, Gallimard, 1994, p. 1098.）

- (7) 訳出にあたっては、現存の各版を参照しつつ、ラブレー協会版を底本とした。OEuvres de François Rabelais, éd. critique sous la direction d'Abel Lefranc, t. 1, Paris, Champion, 1913.
- (8) ラブレーの生年は一四九四年説もあるが、最近有力視されている一四八三年とすれば、『ガルガンチュア』の頃に五十の坂を越えたことになる。
- (9) 以下の、左はラブレー、右はマロの前半部分である。使われている韻は-ard/-ous, -ote/-ousと異なるものの、形態の類似は一目瞭然である。

Chiart,	Linote
Foirart,	Bigote
Petart,	Marmote
Brenous,	Qui coudz,
Ton lard	Ta note
Chappart	Tant sotté
S'espert	Gringote
Sus nous.	De nous.

テキスト併置のアイディアは、M. ユション女史からいただいた。  
(Mireille Huchon, 《Rabelais et les genres d'écrire》, *Rabelais's Incomparable Book*, Lexington, French Forum, 1986)

尚、マロの作品はトマ・セビエの「フランス詩法」に二音綴詩の例として取り上げられている。(Thomas Sébillet, *Art poétique françois*, éd. par Félix Gaiffe, Paris, Droz, 1932, pp. 34-36).

- (10) *Gargantua*, éd. par Gérard Defaux, Paris, Le Livre de Poche, Bibliothèque classique, 1994, p. 178.
- (11) *Gargantua*, fac-similé de l'édition définitive 1542 avec texte établi et présentation par Claude Gaignebet, Alfortville, Quatre Feuilles Éditeur, 1971, fo. 36, v. - fo. 39, r.
- (12) ミハイール・バフチーン『フランソワ・ラブレーの作品と中世・ルネッサンスの民衆文化』, 川端香男里訳, せりか書房, 1973年, pp. 327-332.
- (13) François Rigolot, 《L'affaire du "torche cul": Michel-Ange et l'emblème de la charité》, *Études rabelaisiennes*, Genève, Droz, 1988, pp. 213-224.
- (14) François Rigolot, 《Rabelais et la scolastique: une affaire de canards (Gargantua 12)》, *Rabelais's Incomparable Book*, Lexington, French Forum, 1986, pp. 102-123.

- (15) 森下伸也はモリオールに依拠しつつ「ズレ」としてのユーモアを説いている。「〈馴染みのないもの〉には、新奇なものとズレとの二種類があり、前者と出会う確立が高いのが子供、後者は大人、とした上で、論点をズレに絞る。森下説では「ユーモアはカオスに愛着をいだきつつ、それをもちいてノモスを粉碎し、カオスからノモスを革新する知恵をたえまなく汲みあげてこようとする開放的戦略」である（『ユーモアの社会学』、世界思想社、1996年）。
- (16) スチュアート・ヘンリ『はばかりながら「トイレと文化」考』、文春文庫、1993年、pp. 88-89。